

## 日本の大学における文学教育と言語教育の統合

関戸冬彦

### 論文要旨

本論文は文学作品を英語教育の教材として用いた場合の有効性、また具体的な授業案を提示することを目的とする。論文内では現在、そして未来の英語教育、主に大学の英語授業、における文学教材の有効的な活用方法をめぐって、その歴史的流れを振り返りながら、文学教材と英語教育とが連携できる可能性を探り、そこから学べるポイントを提示すると共に、実際の教室での活動例や実践例を紹介することでその有効性を論じようと試みる。

本論文は上記目的を達成するために以下の5章から成る。全5章はそれぞれが相互補完的に存在し、議論も横断的になっている。第一章は論文の意義や問題点を提示し、始まる。第二章はこれまでの先行研究を、特に英語教育と文学教材をめぐる15冊の書籍を選び、吟味し、論ずる。第三章はそれらをもとに英語教育と文学教材とを融合させるのに必要な10のキーワードを挙げ、またそれらを大きく4つのテーマ毎に分け、その必要性和ポイントを論ずる。第4章では文学教材を4つのジャンル、詩、短編小説、長編小説、演劇に分け、それぞれのジャンルにあった活動例、実践例を第三章で述べた3つのテーマを意識しながら紹介、検証する。そして、第五章の結論では各章のまとめをした後で、本論文で解決できたこと、いまだ解決できないことを挙げ、今後への更なる英語教育と文学教材との関連性、活用に関する展望についても論じている。以下、章ごとにその内容を簡潔にまとめることにする。

第一章では、Introduction (序章) という題目のもと、General Introduction にて現在の日本における大学英語教育の状況を概観する。目下、実用的英語を推進するあまり、教育の本来の目的である人間形成の部分が現在の英語教育では忘れられてはいないか。そうした人間形成の一端を担っているはずの文学が素材として疎まれてはいないか。もちろん、英語教育である以上、文学研究に比重が置かれすぎてもいけない。言語教育と内容理解、つまり文学への理解、がバランスよく行わなければならない。いかにそのバランスを上手に取るか、そしてそれにより効果的な授業ができるか、について論じるのが本論文の目的のひとつでもある。なお、議論をわかりやすく、また誤解のないようにするためにも、本論文における文学の定義を試みる。次に、本論文の想定読者について触れる。大学における英語教育での文学教材使用が主題なので、大学の英語、または文学担当の教員が主たる読者とはなりうるが、それ以外の教育機関、例えば中学や高等学校、の教員でも英語教育と文学教材の融合は活用しうるし、また高等学校の教科書や授業における文学作品使用を研究している研究者もいるので、本論文では広く英語教育関係者を想定読者として設定しておきたい。さらに、この序章では第二章から第五章までの簡潔な紹介も序章内にて行っ

ている。そして序章の最後として、日本の英語授業における文学作品の使用に関して言及する。そこではまず英米文学作品が扱われてきた歴史を概観する。これに関しては江利川春雄の先行研究が秀逸なので、これに基づいて明治から現在に至るまでの歴史的な流れを見る。次に、文学作品を使った際に起こりうる問題点について述べる。問題点は三つあり、訳読、教員の使用言語、評価、である。それぞれに関して問題点を指摘した後、どう解決できるか、についても触れる。その上で、近年の文学作品使用に関する積極的な動きや活動があることに関しての報告も含める。

第二章では、**Review of Literature – Previous Research and Studies**（先行研究考察）と題し、英語教育と文学教材使用に関する文献、論考を 15 冊取り上げ、その内容をまとめ、論じる。15 冊を検討すべき分野ごとに整理し、また分野によっては時代順に追いかけることで歴史的流れも明らかにし、かつ考察すべき重要な点への指摘も試みる。具体的には、**2.1 The Reading Experiences, 2.2 Approaches to Stylistics, 2.3 Cultural Analysis, 2.4 Theoretical Considerations, 2.5 Classroom Activities and 2.6 The Teacher’s Mind** の項目を設定し、順番に取り上げている。最終的にこれら 15 冊の文献、論考は 3 つの論点、**Experiences**（経験）、**Language-based**（言語教育的視点）、**Approaches**（教授法）でまとめ直され、次の章における議論の下地となっている。

第三章では、**Ten Key Points for Language Education and Literature**（言語教育と文学のための 10 のキーポイント）と題し、第二章で文献を整理する際に用いた 3 つの論点、**Experiences**（経験）、**Language-based**（言語教育的視点）、**Approaches**（教授法）を手がかりに、またこの 3 つを大きくカバーするキーワード、**Motivation**（動機）も加え 4 つとした上で、さらに考察すべき事項を細分化し、10 のキーワードを設けている。このキーワードのもと、第二章の文献、論考の意義を再確認し、文学教材の有効性を 10 の角度から検証する。具体的には、**3.0 Motivation, 3.1.1 Experiences - Humanity, 3.1.2 Experiences - Connection to our life, 3.1.3 Experiences - Empathy, 3.2.1 Language-based - Metaphor, 3.2.2 Language-based - Authenticity, 3.2.3 Language-based - Vocabulary, 3.3.1 Approaches - Discussing Ability, 3.3.2 Approaches - Slow Reading, 3.3.3 Approaches - Cultural Content** の各項目に関してそれぞれ議論をする。この 10 項目はどれも英語教育と文学理解との両方をバランスよく授業内にて網羅できるためのポイントであることを確認する。

第四章では、**Usable Methods**（活用出来る実践方法）と題し、文学教材を用いた実践例を 4 つのジャンル、詩、短編小説、長編小説、演劇に分けてそれぞれその具体的な手法を紹介、考察する。これまでの文献、論考の中から援用、発展できる活動例、実践例と共に、執筆者が実際に授業にて実践したもの、あるいはそのやり方を見聞きしたもの、との両方を網羅してある。4.1 Poetry では、6 つの詩を扱った実践を紹介する。特に、4.1.4 **How to Teach Poetry in the Classrooms – Approaches 3** では英語で俳句を書いてみるといったクリエイティブライティングの側面や、4.1.6 **How to Teach Poetry in the Classrooms –**

Language-based and Approaches 2 では詩を題材にしたディベート授業の報告も取り上げる。また、4.1.7 How to Teach Poetry in the Classrooms –Further Approaches では歌詞を扱った授業実践例に関しても言及する。4.2 Short Stories では、短編小説の利点などを概観した後、例えば 4.2.4 How to Teach Short Stories in the Classrooms– Language-based and Approaches 2 においてはヘミングウェイの短編小説を用いた授業実践例を紹介、検討する。4.3 Novels では、長編小説の具体的な扱い方を議論しており、4.3.4 How to Teach Novels in the Classrooms –Stylistics, Approaches and Experiences では *The Great Gatsby* を用いた授業実践例について言及する。4.4 Drama では Drama がこれまでのほかのジャンルと異なる点、特に Performance の取り組み方について、の考察を行う。実践例を検討した後、4.4.7 How to Teach Drama in the Classrooms – Further Approaches では映画を教室で扱う方法についても述べる。

第五章では、Conclusion（結論）とし、これまでの英語教育と文学教材活用についての論点を整理しつつ、まずは各章のまとめを簡潔に述べる。それを踏まえた上で、この論文を通して解決できた6つのポイントを整理する。これらはどれもこの論文において議論されたものである。しかし、未解決のまま、あるいは違った角度からの検討がさらに必要な点、も3つ取り上げる。これらは今後の更なる研究課題である。最後にこの論文での論考が、日本の英語教育における文学教材の効果的な使用方法としての一助となることを再確認し、結びとする。